

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



Part 5

「論考」

「怪談」の作者として知られる小泉八雲ことラフカディオ・ハーン。風物、文化、民俗、宗教を織り込んだその作品群は日本という異文化への深い共感から生み出され、現代にも通じる視点を内包している。ハーンが見た日本人の信仰のありようを、ハーン作品と他の訪日外国人の記述の比較から描き出す。

ラフカディオ・ハーンが見た寺と神社の風景

日本人の宗教的な感性

Makino Yoko 牧野陽子

写真提供／小泉八雲記念館

はじめに



ラフカディオ・ハーンの肖像

明治以降、来日外国人が書き残した日本論や日本滞在記の類は種々多々ある。その中で、今なお読み応えがあるものといえば、やはり、まずはラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の作品をあげなくてはならないだろう。

ない。「雪女」や「耳なし芳一」、「むじな(のっぺらぼう)」などの作者としても知られている。これらの物語は日本の怪談として定着しているが、実は百年ほど前にハーンが日本の古い伝承や民話を掘り起して、再話した作品だった。

ハーンは、19世紀後半の人としては珍しく、西洋優越主義的な偏見にとらわれずに、優れた観察力と深い共感のままざしで、日本の風物や文化、民俗、宗教について記し、明治期の庶民の生活と心情を描いた。土地の伝説や民間信仰、風習などを巧みに作品のなかに

織り込んで、日本の文化の魅力を描こうとしたのである。

ハーンはアイルランド系英国人の軍医を父に、英国軍が駐屯していたギリシャの島の娘を母に、ギリシャのレフカダ島で生まれた。だが、幼くして両親と別れ、アイルランドの親戚のもとで子供時代を過ごしている。その後、一人アメリカに渡って、シンシナーティやニューオーリンズで新聞記者として活躍する。西インド諸島にも滞在して紀行文も刊行した。そして『古事記』の英訳を読んで日本に関心をもち、来日したのが39歳の時だった。まもなく英語教師の職を得て、松江の島根県尋常中学校に赴任し、ついで熊本第五高等学校、さらには東京帝国大学、早稲田大学で教えながら、『知られぬ日本の面影』、『東の国から』、『心』、『霊の日本』、『怪談』、『日本——一つの試

論』など、十数冊に及ぶ日本関連の著書を次々と発表している。松江で小泉セツと結婚、のち帰化して、1904年、東京の西大久保の家で没した。

西洋近代の価値観にとらわれぬものの見方や、庶民に寄せるまなざし、民俗学的な関心といったハーンの特質は、ギリシャとアイルランドという、19世紀西欧世界の辺境かつキリスト教以前の古代世界につながる土地に出発点をもったこと、ギリシャの母への思慕とその母を離縁した父への反発、そしてアメリカの黒人社会やカリブ海のクレオール(*)の文化に触れたことのおかげで培われたと考えられる。さらにハーンの日々を東京ではなく、西洋化・文明化以前の古い文化習慣が色濃く残る地方都市で過ごしたことだった。

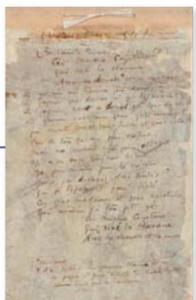
音の風景に描かれた生活のなかの宗教

『知られぬ日本の面影』(1894年)は、ハーンが日本に関して書いた最初の本で、来日直後の横浜周辺と、その後1年あまりを過ごした松江と出雲地方が主な舞台である。序文には、日本の知られざる精神風土を解明したいという目的が表明されており、明治日本の雰囲気と風景と土地の人々の暮らしがよくとらえられた作品と評価されている。

松江の朝を描いた「神々の国の首都」『知られぬ日本の面影』所収)の冒頭部分、おそらくハーンの文章のなかでも最もよく知られた一節だろう。

松江の一日で最初に聞こえる物音は、ゆるやかで大きな脈搏が脈打つように、眠っている人のちようど耳の下からやって来る。それは物を打ちつける太い、やわらかな、にぶい音であるが、その規則正しい打ち方と、音を包み込んだような奥深さと、聞こえるというより寧ろ感じられるように枕を伝わって振動がやって来る点で、心臓の鼓動に似ている。それは種を明かせば米搗きの重い杵が米を精白するために搗き込む音である。(中略)杵が臼を打つ規則的な、にぶく鳴り響く音こそは日本人の生活から生まれる物音のうち最も哀感を誘うものと思われる。実際それはこの国が脈打つ鼓動そのものである。

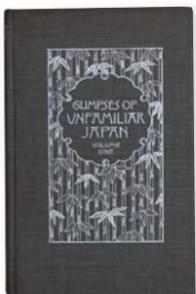
それから禅宗の洞光寺の大釣鐘がゴーン、ゴーンという音を町の空に



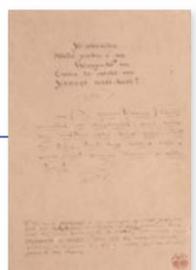
アメリカ滞在中にハーンが記したクレオール文化についてのノート。



『知られぬ日本の面影』2巻組
Sketches of Unfamiliar Japan vol.1&2



1894年に発行されたハーンの代表作。



「雪女」
ハーンの自筆原稿。
〔天の川縁起〕所収
〔化けもの歌上り〕

響かせる。次に私の住む家に近い材木町の小さな地藏堂から朝の勤行の時刻を知らせる太鼓の物悲しい響が聞こえてくる。そして最後には朝一番早い物売りの呼び声が始まる。「大根やい、蕪や蕪」と大根そのほか見慣れぬ野菜類を売り回る者。そうかと思えば「もやもや」と悲しげな呼び声は炭火をつけるのに使う細い薪の束を売る女たちである。「神々の国の首都」講談社学術文庫、1990年

ハーンが、夜明けに耳にし、体で感じるのは、米搗きの杵の音である。その音は大地の底から枕を通して響いてくるようで、まさに日本の生活を下から支える音、この国が脈打つ鼓動そのものだ、ハーンは思う。

米を主食とする稲作の国に在ることを実感しているだけではない。米を搗く杵は、杵築の杵でもあることを想起したのである。出雲大社は古名を杵築大社といい、「杵築とは日本の太古よりの信仰、神道の最古の社を擁する聖地の名」(杵築——日本最古の神社)『知られぬ日本の面影』である。だから古代の神話世界につながる、神々の国、出雲の松江で聞く、大地の鼓動のような杵の音は、いわばハーンの考える神道を象徴する響きなのである。だ

日本人にとっては、ごく普通の何気ない光景だろう。だが、ハーンは、寺という信仰の場の明るさに驚く。祈りと礼拝はいたって短く、人々は互いに談笑し、子供たちの笑い声があふれている。ハーンは、そこに宗教の場らしい「厳かさ」がないという。そして人々の「信仰心のいかにも楽しげな様子」を「暗さ」や「自己抑制」から解放された、心のびやかな宗教のありかたとして感嘆した。

日本の寺の参拝風景に目をとめた人は、もちろん他にもいる。たとえば、1878年に浅草寺を訪れた英国の女性旅行家イザベラ・バード(1831~1904)は、次のような感想を述べた。

そこでもまた彼らはお祈りをする——もし「ナンマイダという」わけもわからぬ外国語の文句をただ繰り返すだけでお祈りと呼ばれてよいものならば。彼らは頭を下げ、両手を上げてこすりあわせ、言葉をつぶやきながら数珠をつまぐり、両手を叩き、また頭を下げる。それが終ると外に出るか、あるいは別の仏の前に行って同じことを繰り返す。(中略)たいていお祈りは急いでなされる。つまらなくて長いおしゃべりの間に



ハーンとその家族。
左からハーン、
長男一雄、セツ夫人。

が、その神道の音のあとに、仏教のお寺の大きな鐘を打ちならす音が、次の町の小さな地藏堂の太鼓をたたく音が聞こえてくる。そして続くのは、往來を行く、さまざまな物売りの声である。その後、ハーンは障子をあけて、朝焼けの空と向こう岸の山々、宍道湖の広々とした情景を描く。川岸から、人々が朝日を拝む柏手の音が聞こえてきて、やがて大橋をわたる人々の下駄の音に変わり、一日の営みが始まっていく。

ハーンは、夜と朝のあわいに、宗教にかかわる想像をめぐらし、地元息づく神道と仏教の存在を感じ取っている。米搗きの杵、寺の鐘、地藏堂の太鼓、人々の柏手など、目に見えるものではなく、もっぱら音の響きに耳を澄ませて、より感覚的に、深い奥底からくるものの全体をつかみとろうとする。さ

らに、そうした感覚の広がりの中で、次に続くのが、往來を行く人々の下駄の響きであり、地元の物産を売る物売りの声なのである。つまり、宗教という魂の領域と、人々の日々の生活の情景。この二つがハーンの関心の中で、おのずとつながっていくわけで、ハーンの関心が赴くのは、生活のなかに根付き、根底で支えている宗教的なるものだといっている。

ハーンが描く 寺と神社の風景

このように、わたしたちはハーンの記事を読んで、明治日本の面影を懐かしく思い起こす。だが、それだけではない。現代におよぶ根本的な問い

はさまれた単なる瞬間的間奏曲にすぎず、敬虔の素振りすらない。(『日本奥地紀行』、平凡社東洋文庫)

バードは英国で牧師の娘に生まれ、敬虔なクリスチャンとして伝道活動も行った人だった。そのバードの目には、浅草の寺の賑やかさは真面目な信仰とは別種のもの映った。大勢の人々が詣でるとはいえ、祈りはあまりに簡単で短く、みな気楽なおしゃべりに興じている。そこに敬虔な心など全くない、と、さぞ苦々しい表情を浮かべただろうことが、文面からうかがえる。そして当時の西洋の人の多くは、程度の差こそあれ、ハーンとは正反対のバードの言葉の方に同調したことだろう。

明治時代の38年間日本に滞在した、英国人バジル・ホール・チェンバレン(1850~1935)は、『日本事物誌』(Things Japanese, 1890)のなかで、「多くの日本人は、宗教は何かと問われると困惑する」と述べて、宗教に対する日本人のあいまいな態度を指摘している。チェンバレンは『古事記』や日本の和歌を英訳し、東京帝国大学文学部で言語学を講じた、著名な日本研究者である。そのチェンバレンは神道について、こう記した。「神道は、仏教が入って来る前の神話や漠然とした祖先崇拜と自然崇拜に対

して与えられた名前である。しばしば宗教として言及されているが、その名に値する資格がほとんどない。神道には、まとまった教義もなければ、神聖な書物も、道徳規約もない」。そして、「神道は、あまりにも空虚で貧弱なもので、人々の心に訴えることができなかった」「神道の社殿は、原始的な日本の小屋を少し精巧にした形である」「神社は茅葺の屋根で、作りも単純で、内部は空っぽである」「(神道)『日本事物誌』とたまたみかけ、伊勢神宮についても、「観光客がわざわざこの神道の宮を訪ねて得るものがあるかといえば、大いに疑わしい」「檜の白木、茅葺きの屋根、彫刻もなく、絵もなく、神像もない。あるのはとてつもない古さだけだ」(『伊勢』同)と述べた。

つまり、神道の「漠然とした祖先崇拜と自然崇拜」はあまりにもシンプルで、宗教にあるべきものが何もない、神社建築も同様である、というのが、西洋人である彼らが共有する認識だったということがわかる。そして、このような神道論に対してハーンは、「神道には哲学はない。体系的な倫理も、抽象的な教理もない。しかし、そのまさしく『ない』ことによつて、西洋の宗教思想の侵略に対抗できた」「神道を、およそ宗教とは言い難いものだという者もあるし、(中

を孕むような記述に出会って、はっとする。たとえば、来日当初、横浜近郊の寺めぐりをしたときのことを記した「地藏」(『知られぬ日本の面影』)という文章のなかで次のように述べている。

そんななかで、私が何よりも強い印象を受けたのは、人々の信仰心のいかにも楽しげな様子だった。暗さ、厳肅さや自己抑制といったものは、彼らには全くみられなかった。厳かさ、いやそれに近いものさえ、露ほども感じられなかった。明るい寺の境内や本堂の階段にまで、大勢の子供たちが賑やかに笑いさんざめき、奇妙な遊びに興じている。本堂の中にお参りに入る母親たちは、赤ん坊が豊敷の上をはいまわり、きゃつきゃつと声をたてても気にとめない。人々は彼らの宗教を気軽に、陽気に受け止めているのである。大きな賽銭箱にお金を投げ入れ、柏手を打ち、短い祈りの言葉を唱え、彼等はすぐに向きかえり、お堂の上がり口で笑顔で語りあいながら、小さな煙管をふかすのである。いくつかの寺では、参詣者たちが中に入りもしないのに私は気付いた。自分たちが創り出した神々、それを畏れすぎることのない彼らこそは、実に幸いである。(前掲書)

略)、学者たちがなかなか神道を解きあかせないのも、畢竟、彼らが神道の源泉を書物ばかりに求めているからである」「しかし、現実の神道は書物の中に生きているのではない。儀式や戒律の中でもない。あくまで国民の心の裡に息づいているのである」と、出雲大社の訪問記「杵築」『知られぬ日本の面影』の中で反論した。

ハーンの反論は、キリスト教に絶対的な価値をおくチェンバレンらへの反論としては、インパクトのある巧みな論法だったといえる。だが、「国民の心の裡に息づいている」とは、どういうことなのか、具体的に何がどのように息づいているのか、この反論だけでは、あいまいで、実感がわいてこないのではないか。

ハーンは、だから日本のさまざまな場面、空間を切り取って、ひとつひとつ描いていくことで、そこに息づくものの実感を提示する。教義や思想ではない幾多の空間の総体としての精神風土をとらえ、示そうとしたといえる。先にあげた、松江の朝の情景も、そのひとつである。

なかでも特に、ハーンが好んで描いた空間が寺や神社の境内だった。昼間、楽しそうな参詣者で賑わう境内は、夏の夜、盆踊りの舞台となる。ハーンは、山陰の海辺の小さな寺を訪

ねた折、月光に照らされた境内で、人々が輪となって歌い踊る様子に見入った。その傍らには寺の墓地があり、ハーンはお盆が死者の祭りであることに思いをはせる。そして戻ってきた先祖の霊の存在とともに人々が踊る空間の幻想性を描いた。「盆踊り」「知られぬ日本（の面影）」

子供たちが集まって遊ぶのも神社の境内である。ハーンは、西洋のキリスト教会の庭と、日本の神社の庭の違いは、子供たちの遊び声が聞こえるか否かだと記した（『日本——一つの試論』、1904年）。「阿弥陀寺の比丘尼」（『心』、1896年）という印象深い小品の物語世界を支えるのも、寺の境内で展開される光景に他ならない。村の子供たちは毎日のようにお地藏さまの見守るなかで比丘尼さんと遊ぶ。かつて幼子を亡くして出家した比丘尼は、子供たちとふれあって癒される。子供はやがて成長すると辛い現実社会へと去っていくが、今度はその子の子供たちが、また遊びに来るようになる。寺の境内は、代々の子供たちが遊ぶ、おだやかな救いの空間になっている。そして、ここでもハーンは、現在の子供たちと過去の、今は亡くなっている子供たちの面影をひとつの空間の中にこだまする遊び声の響きとして重ねるのである。

さまざまな「いのち」のつながり ——日本の宗教的感性

ハーンは、日本の樹木信仰や御神木の風景にも心惹かれた。たとえば、『怪談』におさめられた「青柳物語」は人間と柳の樹の精が歌心を通じて結びあわされる話であり、「十六桜」は人間と桜の古木とが再生を通じて結びつく物語である。

そしてハーンは、そのような人間と深くつながる樹々に囲まれた空間として、神社を描いた。ハーンは神社にいたる参道の魅力について、次のように述べている。

数ある日本独特の美しい事物の中でも最も美しいのは、参拝のため、あるいは休憩のための小高い場所の上で行く途中の道である。それはいわば、無に通じる道、無に至る階段である。（『旅の日記から』『日本の心』講談社学術文庫、1990年）

登りは石畳の傾斜のついた道とともに始まる。多分七、八町ほど続くが、その参道の両側に巨木が聳えている。一定の間隔をおいて石の怪物が警護している。道が尽きるあたり幅の広い石段が何段もあり、緑

の暗がりの中を登ると、さらに大きな老樹が蔭をつくっている台地へと導く。そこからさらに段々が高い方へと続くが、いずれも緑陰の中である。登って登って登りつめ、ついに、灰色の鳥居の彼方に、目ざすものが見えてくる。小さな、中は空ろの、白木造りの社——神道のお宮である。荘厳な参道を長く歩いたのち、静まり返った影の中で私たちが受ける、はっとする空虚の感じは、幽邃な、霊的なものそのものである。（『旅日記から』『心』、河出書房新社、2016年）

ハーンはここで、鬱蒼たる緑のなかを進む参拝の道は「無に至る階段」であり、その到達点として「小さな、中は空ろの、白木造りの社」、つまり「神道のお宮」が現れるのだという。人はその「空虚の感じ」に包まれて驚く。いわば、自然のなかで人間が人工的なものを削ぎ落としながら、一步一步「無」と化し、自然と一体化して昇華されていくような空間を、神社にいたる参道に見出しているのである。ハーンはそのような神社空間で感得するものこそ、「霊的そのもの」だと表現した。ハーンの記事は、神社建築の簡素さを欠点とみなすチェンバレンへの反論としても読めよう。神道が、チェンバ

レンによれば宗教の必須条件たる聖典や聖像など、いわば人為的所産として構築された教理や表象物を排して、森の樹々とともにあること、簡素さを旨とすることを是としているからである。だが注目すべきは、宗教としての大事な部分を、ハーンが周囲の自然との関係性に見出したということではないか。巨木の蔭のなかに息づく太古の自然の霊性、いわば「いのち」に人間が一体化していく過程がここに描かれている。それは、いわゆる「自然崇拜」とも違うように思う。ここに描かれた神社は、自然のなかの聖なる場所を示す単なる指標なのではない。また自然を信仰の「対象」としているわけではない。

前述の通り、チェンバレンは、神道は「漠然とした祖先崇拜と自然崇拜」から成ると述べた。いいかえれば「先祖」と「自然」というそれぞれ別のものを崇める、二つの要素があることになる。

だが、ハーンの描く寺の境内や神社の参道には、その「祖先崇拜」と「自然崇拜」の違いを超えて、共通するものがあるということに読者は気付く。昼下がりの境内では、亡くなった人々の霊魂が子供たちの遊びを見守り、夏の夜は今を生きる者の踊りに寄り添う。神社の参道を登ると、老樹が太古の自然の霊性のなかへと人を包み込む。里

山の樹々や生物の精霊は人間と交わり、時に結ばれる。

つまりハーンが一貫して描くのは、現世の人間と、さまざまな目に見えぬ「魂」とのつながりであり、人間と人間ならぬ霊力が同じ空間のなかに共に存在し、結びつくという感覚なのである。この世を生きてきた代々の人々のいのち、また人間以外の、人間を超えたいのち。人々の周りに、そういういのち——それを「八百万の神々」といいかえてもいい——が満ち溢れていて、人はそういう幾多のいのちと共にあることを実感する。それこそが、日本の宗教的な精神風土であり、宗教的な感性だとハーンは考えたのではないか。

そして、このような壮大な空間と時間のいのちのつながりの中に、みずからの存在基盤を見出す時、いわゆる「宗教」の教義や思想体系、規律などを絶対視することはなくなるのではないか。それらは言語化された宗教的表現の形にすぎない。いいかえれば、根底にある日本人の宗教的感性の表層を飾るものとしてならば、そうした教義をも受け入れることができるのである。そして時には、表層を張り替えることもあれば、またひとつに拘泥することなく複数共存させることも、気楽に許容できるのではないか。だからこそ人々は

神社仏閣に詣でも、ハーンが横浜で驚いたような「穏やかな、気楽な笑顔」を浮かべるのであり、松江の朝の描写におけるように、神話も神道も仏教も民間信仰も、ポリフォニックなひとつの響きの空間のなかに溶けこむのである。

チェンバレンやバードは、人はひとつの宗教の教義だけを奉じるものだという前提にたって、日本人の宗教の、あ

いまいさゝかを論じたが、現代でも事情はそう変わっていないといえよう。宗教的寛容性の必要が説かれるとき、それは、自分の宗教とは異なる他者の宗教を認めることを一般的にはいう。たとえば、ひとつの町のなかに、教会とモスクが争うことなく共存混在するような、多宗教社会である。だが、ハーンは、そのような宗教的寛容と多宗教の共存が、日本ではごく当たり前に一



「稲田の風景」

ハーンは日本の風景をスケッチでも数多く残した。「稲田の風景」には、鳥居が描かれている。

(Reichow 1896)

人一人の心のなかにすでに根付いていると考えたのではないか。イデオロギで束縛することなく、自然の大地に根差すかのように根底から人を包み込み支える日本の宗教的感性に、だからハーンは心惹かれ、さまざまな情景の中に、五感を駆使した優れた文章で描いたのである。

先にあげた「地蔵」の引用文の最後で、ハーンはこう述べていた。「自分たちが創り出した神々、それを畏れすぎることのない彼らこそは、実に幸いである（Blessed are they who do not too much fear the gods which they have made!）」。

キリスト教のゴッドも、イスラム教のAllahも、仏教の仏も、日本の八百万の神も、所詮、人間の創造物だといえるのである。ハーンはこの言葉は、宗教によるテロがあいつぐ現代世界の問題を照らし出し、ひととき重みをもつのではないか。そして、ハーンが見出した日本古来の心のありようは、まことに「幸い」だったと思えるのである。

（*）植民地で生まれ育ったヨーロッパ人の呼称。

Makino Yoko

名城大学教授。1953年生まれ。比較文化学者。東京大学大学院博士課程修了。主な著書に『ラファディオ・ハーン——異文化体験の果てに』『時をつなぐ言葉——ラファディオ・ハーンの再話文学』、共編著に『講座 小泉八雲』など。